

iPad のカメラ機能を用いた生徒同士の関わり合いを深める活動

東京都立石神井特別支援学校 教諭 北波 朋
 キーワード：iPad、カメラ、動画、映像表現

1. はじめに

日頃の学習活動、生活指導場面はもとより、学校生活内で iPad を使用したり、ICT 機器に触れたりする場面が多くなってきている。正しく ICT 機器を使えるよう、また、それと少しでも上手に関わることができるよう、学校、家庭での日常生活に基づいた活動を基本として、生活単元学習の授業で1年間を通して「タブレット端末を活用しよう」という単元を設定している。また、家庭での余暇活動や、趣味分野の拡大も視野に入れ、様々なアプリやコンテンツを活用し授業を進めている。

特別支援学校における iPad の活用に関しては、個々に対しての活用、支援技術としての活動が主であり、友達と一緒に使用したり、小集団で使用したりすることは少ないという印象を受ける。生徒達の iPad に対する姿勢は意欲的で、興味関心も高い。環境を設定し、上手に活用することで、自然に生徒同士が関わり合い、学び合う場が形成される可能性があると考え、本実践を行った。

2. 目的・目標

iPad のカメラを使用する利便性は、デジカメを使用して、PC につなぎ閲覧したり編集したりするよりも、明らかに簡単で手早くでき、iPad 1 台ですべての処理を完結できる面にある。

本実践では、iPad の基本的な機能であるカメラを使用して、写真・動画を撮るといった活動を通し、生徒同士が互いに関わり合える場面をたくさん設定し、相互のコミュニケーション力の向上と作品の共有、学び合いをねらいとした。本実践でカメラ機能に重点を置いた理由は以下の3点が挙げられる。①操作方法が簡単であること、②多くの生徒が興味をもって意欲的に活動できること、③自宅等での活用に直接つなげていくことができること、の3点である。特に②にあるように、生徒たちの興味関心度はとても高く、毎時間集中して意欲的に活動に取り組むことができていた。





障害のある子どもたちへの ICT 活用は、支援技術 (Assistive Technology) としての活用だけではない。本実践のように ICT 機器を効果的に活用していくことで、自分たちで何かを作り出したり、創造性や創作性を表現したりすることができるため、自分たちの手でたくさん触れ、体験し、感じることで、それらの側面の成長を促していきたいと考える。

3. 実践内容

3. 1 授業の展開と生徒の様子

中学部1年生21名を対象に、本実践を行った。対象学年では、生活単元学習の単元に年間を通して「タブレット端末を活用しよう」というものを設定しており、週に1回程度、iPad を用いた活動を行っている。本実践では、iPad のカメラ機能を使用し、表1にある実践を行った。

表1 実践の内容

	<p>①カメラ機能を使って、学校の写真を撮ろう (全2時間)</p> <p><活動内容></p> <ul style="list-style-type: none"> ・iPad のカメラ機能の基本的な使用方法を学んだ。(起動の仕方、iPad の持ち方、シャッターの押し方、ピントの合わせ方等) ・画面内に対象物を捉えてシャッターを押す練習を行った。学校内の物でお題を出し、各クラス単位で見つけて写真を撮ってくる活動を設定した。 <p><生徒の様子></p> <ul style="list-style-type: none"> ・シャッターを押して写真が撮れる仕組みを知ると、意欲的に活動に取り組み、「やってみよう」という意識がたくさん芽生えていた。
	<p>②カメラ機能を使って、友達の写真を撮ろう (全2時間)</p> <p><活動内容></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分のクラスの友達の写真を撮る活動を設定した。写真を撮る際に、「ハイチーズ」や「笑って笑って」などと友達に声をかけることを目標とし、互いに意識を向けあって、関わりあえるよう工夫した。2時間目は、他のクラスの友達とグループを混ぜることで、関わり合いの幅を広げられるようにした。 <p><生徒の様子></p> <ul style="list-style-type: none"> ・iPad の画面に友達の顔が映ることで、親近感をもって活動に取り組める生徒が多かった。撮影時に互いにやり取りをしたり、意識し合ったりしている場面が多くみられ、自発的な関わり合いをすることができた。
	<p>③カメラアプリを使って、動画を撮ろう (全2時間)</p> <p><活動内容></p> <ul style="list-style-type: none"> ・『メトメカメラ』というアプリを使用した。各クラス単位や、クラスの友達を混ぜて友達の動画を撮影後、様々なデザインの様式や映像効果を重ねて作品を作り、発表会を行った。 <p><生徒の様子></p> <ul style="list-style-type: none"> ・写真を撮る活動から、動画を撮る活動に移行し、対象物を画面内に捉え続けられるよう練習しながら活動に取り組んだ。 ・友達の動画に編集を加えることで、個性的な作品に仕上げることができ、映像の変化を楽しみながら活動に取り組むことができた。カメラを向けられた生徒は表情を変えたり、動きを加えたりしながら、撮られることを楽しんで受け入れていた。
	<p>④コマ撮りアプリを使って、アニメを作ろう (全5時間)</p> <p><活動内容></p> <ul style="list-style-type: none"> ・『komakoma』というアプリを使用した。各クラスごとに協力して、対象物にコマずつ変化を加えてシャッターを押し、撮った写真をつなげて一つの作品に仕上げた。始めは画用紙に絵を描き足していく作品、顔を少しずつ描いていく作品、対象物を少しずつ動かしていく作品、粘土に変化を加えていく作品のように、作品のテーマを毎時間変えて、作

品作りを行った。
 <生徒の様子>
 ・クラスごとに作品を作ったことで、互いの意見を尊重したり、自分の意見を提案したりする様子が見られ、協力して活動に取り組むことができた。

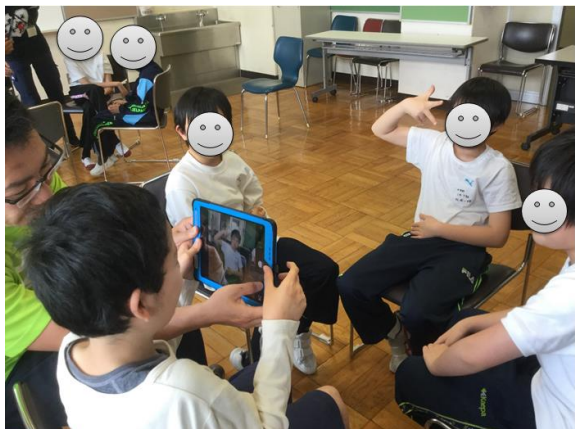


写真1 iPadのカメラ機能で写真を撮り合う様子

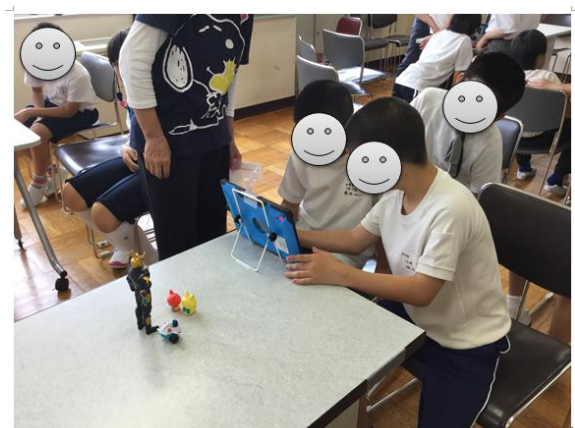


写真2 iPadのアプリでコマ撮りアニメを作っている様子

この実践は、iPadの基本中の基本であるカメラ機能を使い、様々な活動を行うことに重点を置いた。表1の①、②の活動は、iPadのカメラ機能の基本を学び、生徒自身の力で活動に取り組めるよう設定した。『写真を撮ること』という単純な活動の中に、対象物や相手との距離感を学び、撮る側から相手に対して、「ハイチーズ」等の働きかけを行うことで、関わり合う、相手を意識し合う、といったコミュニケーション力を育むことができる活動となった。表1の③、④の活動は、写真を撮る活動を経て、動画を撮影し、作品作りにつなげていくという展開とした。③では、身近な友達という存在をテーマとすることで、親しみをもって作品作りを行うことができ、互いに声を掛け合ったり、笑いあったりする雰囲気の中で活動に取り組むことができた。④では、対象を紙や粘土等の物に変え、対象物に変化を加えていくことで、コマ撮りアニメを作ることができる面白さを味わうことができた。作品を作っていく過程を通し、グループ内で相談したり、友達の意見を

尊重したり、譲り合ったりと、協力して一つの作品作りに取り組むことができたので、共同学習の側面からも効果的な学習活動となった。

4. 成果

週に1度程度iPadを用いた活動をすることで、登校時に「今日はiPadやりますか」等といった発言が聞こえるようになり、生徒自身の期待感は日に日に高まっていると考えられる。今回はカメラ機能を用いた活動に絞ることで、「iPadだからできる」という活動に深みをもたせることができ、生徒達も段階を追って、様々な活動に取り組んでいくことができた。iPadを通して画像や映像などが視覚的に提示されることで、生徒達の興味関心は高まり、活気のある授業となることで、自然と生徒同士が関わり合おうとする環境が形成されたと考えられる。生徒たちが意欲的、積極的に取り組める活動の中で、iPadを互いに関わり合うツールの一つとしての位置づけもすることができ、今後の活用にも期待をもつことができた。「共同学習」の形態になるまでは時間はかかるが、以下のような流れで徐々に学習形態を作っていくことができた。

- (1) 教員を介して、小グループで活動に取り組み、活動内容、方法、指針を提示していく。
- (2) (1)で取り組んだことを基に、生徒自身、生徒同士で活動に取り組めるよう環境設定を行う。生徒が自分で取り組み、遂行する場面を少しずつ増やしていく。
- (3) 生徒が自分達でできる場面は任せ、できるだけ生徒同士で活動に取り組む。生徒の実態に応じて補助、または生徒同士で補助できるよう指導する。
 (クラス、グループの実態によっては、③までできない場合もあるが、②までの取り組みの中で、随時関わり合う場面を設定して実態に応じた関わり方で活動を行った。)

上記のように環境設定することで、ある程度共同学習の形態を作ることができ、生徒同士で関わり合いながら活動に取り組むことができた。写真を撮る実践では、「はいチーズ」「笑って笑って」「こっち向いて」などと自然に言うことができる生徒が増え、動画を作成する実践では、「こうすればどう?」「こうやってみよう」などの発言も聞くことができた。また、重度重複学級に在籍する生徒で、他の生徒と一緒に小グループで活動するのが苦手な生徒でも、iPadを用いることで、興味関心を示し、友達と関わり合いながら活動を共有することができた場面も見られたので、一つの良い事例となった。

5. 今後に向けて

本実践では、iPadを効果的に活用することが、生徒同士が授業内で関わり合い、学び合うことができる場面を増やす一つの手がかりとなった。カメラ機能という単純かつ身近な機能でも、使い方によって生徒の様々な側面を刺激し、成長につなげることができる可能性を秘めている。今後も、様々な実践を検討し、深めていくことで生徒同士が関わり合い、学び合える環境を作っていけるよう研鑽していく必要がある。